

「機能不全家族」それぞれの人生観醸成を終着に

C 氏（40 代女性、家族）

貴院（札幌太田病院）との出会いは昨年 10 月、ちょうど一年ほど前、母のギャンブル依存症治療のための病院探しで、ホームページからメール相談を行ったことに始まります。

現在 70 代の母のパチンコ歴は長く、改めて想起すると 50 年近くを費やしてきました。私が物心ついた頃には、自宅からパチンコ店までの中小市の繁華街を、母に手を引かれ、母の歩幅に引きずられるように、それでも幼心にうきうきと付いていったことが、今となっては曖昧な記憶となって残っています。

私の家族は両親兄妹の 4 人家族です。母がパチンコを続けるための時間や資金作りのために、家庭では嘘や裏切りが日常化し、子供の非行を招き、家庭不和、崩壊に陥り、家族としての機能を失っていきました。

アダルトチルドレンという言葉をご存じでしょうか。機能不全家族で育った子供のことをいうのだそうです。「アダルトチルドレン」「機能不全家族」、私が初めてこの二つの言葉を知ったのは、高校生でした。

当時、生きづらさを感じていた私は、手あたり次第本を読み漁り、そしてある書籍の中にこの言葉を見つけ、その意味を知った時に、初めて自分自身のことや置かれている環境を客観的に捉えることができたように思います。

「なぜ、自分はこのような思考回路なのだろうか。他の人と異なるのは、なぜなのだろうか。」様々な疑問の答えが、見つかったような気がしました。

それからの私は、如何に家族の立て直しを図るべきかの方策を模索し、母に依存症の治療を受けさせることが先決である、との思いに行き着きました。

さっそく父へ賛同を求めましたが、理解は得られませんでした。その頃はまだ、ギャンブル依存症というものが、メディアなどで取り上げられる機会は少なく、現在ほど社会問題化されてはいませんでした。母もまた、自分がギャンブル依存症であると認知するには足りない状況でした。

その後も、様々な策を講ずるも、依存症に翻弄されては、徒労に終わることを繰り返し、やがて私自身も、進学、就職、結婚、出産と、ライフステージの移行に伴い、母のギャンブル依存症の問題は、二の次へとなくなりました。

そんな最中の平成 15 年、父が病死。父の死に私は思いました。「これは、母が変われる、最後のチャンスかもしれない。」と。

母自身の人生の転機が、パチンコをやめるきっかけになるかも知れないと考えたのです。

父の死後、私の居住地の近くにアパートを借りて母を住ませ、1 カ月の生活費は本人が管理する事になりました。しかし、状況はかわらず、すぐに家賃の滞納が始まり、最終的には私が管理していたはずの数千万円の父の遺産も、知らぬ間に母の手元に移っていました。母と連絡は取れず、私は絶望し、「これで変わらないのであれば、もう無理だ。」と匙を投げたのです。

数年も経たないうちに家賃の催促が来るようになり、ほどなく母からの金の無心が始まりましたが、私は家賃だけを払い続け、母との関係は一切拒んでいました。そのうちに、無心の連絡も途絶え、そのまま 15 年の月日が過ぎ去りました。

このようにして、母のギャンブル依存は、時間をかけ、その時代背景と共に変容を加えながら、しかし、着実に進行していったのです。休むことなく、パチンコ台に向かい合ってきた肉体や精神は、依存症からの脱却の糸口を見出せぬまま、その人生の大半をパチンコ店の中で過ごすことになってしまったのです。

現在私は、居宅介護支援事業所で介護支援専門員として働いています。自宅で生活する要介護者やその家族の、日常生活の困り事の相談や、関係機関との連絡調整・介護保険等のサービス調整などを行い、自立支援の手助けを行うのが主な仕事内容です。様々な問題解決への相談を受ける中、気づいた事が二つあります。

一つは、「人間は一人では生きては行けない」と言うことです。どのような人間であろうと、社会の一員であり、他の人間と関わりを持ち、その相互関係の中で暮らしています。「問題は、一人では解決できない」ということです。例え個人の問題であっても、複数の人間が関わり、支援の手が差し伸べられるのです。とりわけ家族の支援力は大きな柱となります。

そしてもう一つ、自身への隠せない気持ちの芽生えです。それは、自分の家族の問題解決も置き去りにしたまま、他の問題解決に心を注いでいる、己の矛盾です。母の問題解決こそが、これからの私自身の人生観の醸成へとつながる、見過ごすことのできない課題であると気づいていたのです。

そのような折、一報が入りました。管理会社からの母のアパート立ち退きの件でした。かくして、母娘は 15 年ぶりの再会を果たし、今日に至るのです。

現在母は、自分がギャンブル依存症である事を自認し、私と一緒に月 1 回の受診と、週 1 回の G A への参加を続けています。その事実を受け、兄とも連絡が取れるようになりました。

15 年ぶりに結ばれた、家族の絆を失いたくないと、自分と向き合い、家族のために懸命に依存症と戦う母の姿に、私は「真の母」を見るのです。

家族再建の模索していた高校生のあの頃、その渦中にあった私は、まさに機能不全家族の一員であり、他に力を求める術もなく、私一人の力では何の変化も、もたらすことはできませんでした。

あれから 30 余年、家族それぞれの人生が過ぎ行き、人生の折り返し地点をも過ぎたいま、再会した意味はどこにあるのでしょうか。

過去を変えることも、失った時間を取り戻すこともできません。しかし、残された時間で、これからまた未来を築くことができるのです。それは、私が子供の頃に思い描いた家族の形とは異なるのかも知れません。それでもその終着には、家族がみな穏やかな温かい気持ちで在りたいと願うのです。

家族が足並みを揃え歩む道程は、きっと父が見守ってくれるでしょう。